

弥富市小中学校適正規模検討委員会 会議録

日 時 平成26年2月20日(木) 午前10時00分
場 所 弥富市役所 視聴覚室

【出席者】吉田 正委員、服部正美委員、佐藤 孝委員、佐藤成男委員、福本吉樹委員、
恒川義雄委員、奥山 巧委員、服部 博委員、東嶋とも子委員

【欠席者】松川由香委員

【オブザーバー】伊藤昭三教育委員長

【事務局】下里博昭教育長、服部忠昭教育部長、片山幸毅教育部次長、立松則明課長、森 敦睦主
幹、水谷みどり課長補佐、柴田寿文課長補佐

○ 議 事

学校教育課長 皆さん、おはようございます。

定刻になりましたので、ただいまより第4回弥富市小中学校適正規模検討委員会を始めさせていただきます。

初めに、委員長さんから御挨拶よろしくお願ひします。

委員長 おはようございます。

第4回目ということで、きょう、最終的ではないんですけども、このメンバーでの取りまとめをさせていただいて、事前に了承をとるという形になるということですので、御意見をよろしくお願ひします。以上です。

学校教育課長 ありがとうございます。

それでは、議事のほうは、委員長さんの取り回しでよろしくお願ひいたします。

委員長 それでは、皆さん方に、これまでの取りまとめた内容が事務局のほうから送られていくことと思いますので、事務局のほうから、その御説明からお願ひしたいなと思いますので、お願ひをいたします。

学校教育課長 それでは説明させていただきます。

本日の案内文書とともに、ホッチキスどめの3枚ほどのものがございますが、平成25年度弥富市小中学校適正規模に関する取りまとめ(案)ということでお配りしたものを見ていただけますでしょうか。

1枚めくっていただきますと「はじめに」ということで、この委員会が組織された経緯を記載させていただいております。

その隣のページですが、弥富市の教育をめぐる状況と課題ということで、今までうちのほうが説明させていただいたような状況を取りまとめさせていただきました。

1枚めくっていただきますと、各委員さんの意見ということで、前回、小・中学校のほうを見ていただいた後に、皆様方のほうから出た御意見をまとめさせていただきました。

最後に「とりまとめ」というところで、皆様方の意見を集約したような格好で載せさせていただきます。ちょっと読ませていただきますので、よろしくお願いたします。とりまとめ。

弥富市立小学校における小規模効果の教育環境を考慮すると、大規模校に比べて子供と先生との距離が近く、個々に対応したきめ細やかな教育ができるのではないかといった意見が多く出されました。

また、クラスがえがないので、お互いの関係を深めて学級づくりがしやすい。

ただ、小規模校の場合、人間関係の問題があった場合、クラスがえができなかったり、行事を行うときに、人数が少ないため運営が難しいといった意見が出された。

中学校の場合、少人数となると、学級のルールや生徒の中の価値観が固定化されがちになり、多様な物の見方、考え方を学んだり、そこから生徒みずから新しいルールや学級文化、人間関係をつくり上げようとする機会が少なくなるため、生徒に自主性、主体性や社会性などが育ちにくい面がある。

また、指導する教師、参加する生徒の数が少なくなるため、部活動が制限されることがある。

今後、中学校の規模をどうするかということが大きな問題になってくると考えるということで一応まとめさせていただきましたが、皆様方の意見をちょっとお聞きしていただいて、あと、まだ何か補足で追加したほうがいいのかということがあればお聞きしていただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

委員長 事務局のほうで簡潔に取りまとめでいただいたわけですが、前回、前々回、第1回からさまざまな意見が出されておまして、私もこの書類と申しますか、今回の議事の取りまとめを送付されてきて、どのように取りまとめていくか悩んでおります。

それで、最初の原点に戻って、我々委員がどのようなことを諮問されているかということで、委員会の設置要綱、第1回目に配っていただいたやつをちょっとまた見直したんですけども、第1条の設置の趣旨だと思んですけども、お持ちの方はごらんになっていただくといいんですが、第1条、児童・生徒数の減少に伴い、弥富市立小・中学校（以下学校という）の小規模化が進行していく中で、学校生活、学校運営に関する諸問題を調査し、学校の適正規模について検討するということでもあります。

それで、この所掌事項は何かというと、委員会は学校規模の配置の適正化、学校規模及び配置の適正化、ここところが1つと、それに向けた具体的な方策、この2点を市長に提言するということが決まっているという解釈だと思います。ですから、この2点についての審議と申しますか、協議をいただくということが大事ななということをお願いたします。

もう一度申しますけれども、学校規模と配置の適正化、これは学校規模というのは児童数、生徒数のことでいいのかなと思います。配置というのは、ちょっとこれはよくわ

からないんですけども、その場所をどうするかということなのか、それとも子供をどの学校に配置するか、または教員配置なのかというところがよくわからないということであり、それを全てまとめれば配置と解釈するのかなあと思いますが、その適正化。その適正化の具体的な方策というのは、恐らくここではなかなか出てこない、第1回では出てこないのではないかなということは思いますので、この具体的な方策についての申し送りというのをきょうやっていただきたいなということでもあります。

そこで、今回取りまとめていただいた弥富市立小学校、それからその下の段にある中学校、小学校の場合と中学校の場合を取りまとめていただいたという理解をしておりますけれども、これにつけ加えて皆様方の御意見は多分さまざまあったと思いますので、こういう形で小学校と中学校は、この委員会の中でやっぱり特色が違っていると、具体的に言いますと小学校は歩いて通う、中学校は自転車でも通えるから遠くてもいいという話が出てきておりますので、小学校と中学校と分けて議論を進めていけたらいいんじゃないかなということは思います。

そういう方向でよろしいでしょうか。

最初に、取りまとめが小学校になってくるので、小学校のほうから御意見をいただければと思いますけれども、どうですか。御自由にお話ししていただければ、教育的視点でこの取りまとめが書かれてあるんですが、ほかの視点、防災的な視点も出てくるのかなと思ったり、通学の安全の視点もあるのかなということは思っていますけれども、御意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

その前に資料の説明をいただけますか。

学校教育課長

先ほど、ちょっと私のほうで説明をし忘れてしまって申しわけなかったんですが、1枚ぺらでA4の用紙で別に、平成26年度入学予定者数という一覧表をきょうお配りさせていただいたんですが、一応来年度、各小学校に入学される予定の男女別の人数でございます。

これは日々変わりますので、今年度一番最初にうちのほうで入学予定者のリストをつくったときの人数でございますので、今までに当然出入りがございますので、今とは若干変わっておりますが、一応当初につくったときの人数が、白鳥小学校が男子が20名、女子が23名、計43名、弥生小学校が男子が58名、女子が57名、計115名、桜小学校が男子が36名、女子が36名、計72名、大藤小学校のほうは男子が13名、女子が15名、計28名、栄南小学校のほうは男子が10名、女子が6名、計16名、十四山東部小学校のほうは男子が12名、女子が18名、計30名、西部小学校のほうは男子が9名、女子が9名、計18名、日の出小学校のほうは男子が49名、女子が46名、計95名で、弥富市内として全体で男子が207名と女子が210名、計417名の方が新年度新たに小学1年生になる予定の子供でございます。

委員長

この資料は、平成25年7月ですね。

学校教育課長

25年7月31日です。

委員長

最初の第1回目で資料をたくさん配っていただきました学校区別年齢別人口、ゼロ歳から15歳の一覧表で、来年入学するのは5歳児ですよ。5歳児の子が1年生に入学す

ると。だから、ことし6歳になると。

それを見ますと、若干プラス・マイナスはありますけれども、ここの表、ページに表があるんですけれども、そこの5歳児のところと大体合致するということでよろしいですね。

学校教育課長 はい。

委員長 小学校について、ちょっと皆さん方から御意見をいただければと思います。

委員 今まで私お話しさせていただいたポイントはここの中に網羅されていると思いますので、やはり先ほども話題に出ていた距離、徒歩だということでの通学時間、距離の問題がやっぱり一番ということと、それからここに書いてあるメリット、先生との距離が近いとかいうことは当然本校も感じておりますし、またデメリットとしては、ここに書いてあるような内容はまとめてあるので、私はこれでいいかなと個人的には思っております。

委員長 メリットとデメリットという視点で、この報告といたしますか、取りまとめをさせていただきますけれども、そこをはっきりしておくといいかなと思いますけどね。その点で、どうしていくかということになるかと思っておりますけれども。

小学校についてはよろしいですか、こういうようなことですかけれども。

いろいろ前回の議論、お話を聞いていても過小規模にはならないということなので、小規模校ではあるけれども、学校生活及び学校運営上は、小学校の場合は余り大きく問題とは言えないというような話を聞いているんですけれども、そういう視点でよろしいですかね。

委員 小規模の学校でもこういう形とか、だけどこういうデメリットがあるんだという、そういう捉え方はどちらかといえば……。

委員長 そうですね。メリットとデメリットを並列して今回まとめたほうがいいということですか。

委員 それは、じゃあ、いつまでもこの状態でいいのかということで、例えば、もっと少子化が進んで子供が少なくなった場合に、例としては2学年統合しなきゃいけない状態が継続すると、そういった場合には、ある程度統合ということも、将来的には考える必要があるということではないか。

その場合に、今、通学の問題が出ましたけれども、例えばスクールバスを整備するか、そういったことも将来的には、いつそういう状態になるかというのは予想はつくので、そのあたりも整備が前提で統合というふうになるのではないかと考えております。

委員長 そういう御意見、前に出たと思っておりますけれども、どこまで先を見越すかというところが、この委員会の問題だったと思っております。十年一昔、10年先どうなるか、なかなか予想もつかない。先ほどの向こうの舟入小学校がもう新入生が複式学級になっていると。

委員 いえ、極端に少ない学年、男子のみで、4年生が5年生が9人というクラスがあって、まだ複式ではありませんけれども、もう2桁です。全校生徒合わせて、そういう状況が舟入小にはございます。

委員長 周りの学校ですよ、複式学級等があります。複式学級にせざるを得ない状況なんですよね。合併しても通えないので、ああいうところは。いずれにしても複式学級にせざるを得ない。将来的には、そういうことも考えていかなきゃいけないと思いますが、現時点での小学校は、栄南の子でしたかね、すごく朝真っ暗のうちから通学という、現状はもうそういうところもあるということですね。

委員 そうです。

東末広の子も、現状はもう50分近くかかりますので、だから、12月だと本当に家を7時ごろ出て、帰りも4時に下校といっても、もう4時半に本当に暗くなって、曇っていると12月は暗いので、家に着くころは真っ暗。日程表の関係でどうしても4時下校というのは当然出てきますので、職員にいつも学校ができることは、下校時間をきちっと守って出すということしかできないもんですから、あと、どこの市内でも一緒ですが、防災無線で呼びかけてもらったり、地域の方々、見守り隊の方々に本当にあとはお願ひしていくということしかできないもんですから、そういう形でやっているのが実情ということですね。

委員長 今回は、多くの委員さんが4人を除いておかわりになるということですので、来年も同じ議論をしても仕方がないと思うんですね。ですから、具体的にさっき校長先生が言われたようなことも記録しながら申し送りができるといいかなということを思いますけれども。

それは、事務局のほうの記録はよろしいですか。それぞれのを書いていただいて、そこを申し送って、要するに通学の問題ですよ、それは現状でもあるということもお願いしていくということ。あと、小学校でいろいろ修学旅行も、複数の5年、6年で行くんでしたよね。

委員 修学旅行は行けませんので、それは無理ですので、本校が工夫しているのは社会見学は本校の場合、年2回の社会見学はバスを利用して、授業の内容に合わせて日を設定して行くということでやっていますので、そのときにやっぱりバス代の費用がすごく負担になるもんですから、できるだけ低学年1・2年は一緒、3・4年も一緒と。

ただ、5・6だけが学習内容で、とても、実は今までばらばらでやっているんですね。やっぱり見学場所も一緒にできないもんですから、ですから来年、今4年生が実は11人という状況なもんですから、来年も5年生・6年生となるので、今もその社会見学のことをどうしていくかとか、今の11人いる4年生が6年生になったときの修学旅行をどうしていくかとか、それから卒業アルバムをどうしていくかとか、それについては今も既に準備をしているという状況です。

それからもう1つは、前もお話ししましたが、いわゆる野外活動、キャンプといいますが、そのバス代がかかるので2学年で行っていると。だから、本校の場合、4年と5年が合同で持っていくと。だから2回行けるんですけども、そういう形をとっています。

委員長 さまざまな小規模校は工夫をしていただきながら、そういう、特に外へ行事については御苦労が多いと思います。

委員 メリットとしては、以前もお話ししましたが、単学級ですので、市のバスをあいているときはお借りできるものですから、本当にたくさんお借りして、いろんな市内の見学、前もお話しした例えば市役所や図書館も当然来ていますし、コンテナターミナルとかも行って見学はバス1台押さえれば1学年で行けるものですから、本当にそれはありがたく思っています。

委員長 市のバスはただですか。

委員 ただです。学校の場合はただになります。本当にありがたいです。本物を見るというのは、やはり映像とか本では味わえないものですので、直接そのところへ行って、見て、そこの方のお話を直接聞くというのは、生の声を聞くというのは本当に子供たちにとっては、これにまさる教材はありませんので、本当にありがたいと思っています。

委員長 教育的な視点の今お話をさせていただいていますけれども、規模の大きな学区の委員の皆様方は、小規模校だけの今メリット・デメリットですけれども、過大規模は今ないんですかね。

大規模校はありましたよね。

教育部長 大規模校はございます。

委員長 大規模校はどこでしたか。

学校教育課長 きょうお配りの（案）の1枚めくっていただいたところに、弥富市の教育をめぐる課題と現状というところで、1番のところでも過大規模校と今委員長さんが言われた、まず小学校につきましては、過大規模校がなしで、大規模校が弥生、日の出でございます。それで、適正規模については、桜、白鳥。小規模校が大藤、栄南、十東、十西。過小規模はございません。

中学校は過大規模校がなく、大規模校が弥中、適正規模が北中、小規模校が十中、過小規模校はないということでございます。

委員長 だから、一番上と一番下はなくて、真ん中の3つぐらいで集約されているということだと思いますが、過大規模はないんですけど、大規模の弥生、日の出の学区の皆さん、いかがでしょうか。小規模校ばかり問題になっていますけれども、そのあたりの御意見もいただいたほうがいいかなと思いますけれども。十分だ、これぐらいなら問題ないよということですか。

小規模のほうが当然問題だと思うので、大規模になっても大きな問題は発生しないということで、逆に大規模のほうが設備が整ってよくなるということでしょうか。大規模についてはよろしいですね。

委員長 小学校については、今のようなお話でありますけれども、中学校のほうがより問題点があるような気がします。中学校のほうの取りまとめたいただいた中学校の場合、少人数となると、学校のルールとか、ここのあたりのところから見ると余りメリットのあるような話ではないので、このあたりのお話をつけ加えていただくとありがたいかなということは思います。

委員 私の意見をまとめてあるんですけど、私が一番言いたかったことは、この弥富中学校、今は大規模校ですけれども、これからどんどんふえていくということなんです。この前、

弥富中学校に皆さんと一緒に見に行き、全員がことごとく先生のほうを向いて、本当に真面目に授業をやっています。あの規模で、あれだけ正常に学校が経営されている学校はなかなかないですよ。

教育困難な学校が多い中で、弥富中学校が本当に安全・安心な学校を運営しているというのは、先生らの努力もそうですし、地域の力もそうですし、またあそここの場所がよかったかもしれない。

これは、そういう意味では、あの学校をこれ以上大きくして荒れた学校にしないように、やっぱり生徒一人一人を大事にするには、大きくなったらもうわからなくなります。

弥富中学校がこれから760人、70人とふえていくと、逆に十四山中学校がこれから減っていくということになれば、誰が考えてもこれは通学区域を少し変えれば、過小になるのを防げるし、過大になるもの防げるといったら、もうこれは皆さんが知恵を出して、この平島のほうを区切るよう考えた方がいいと。これが子供にとって一番大切なこと。一人一人を大事にする。

合併する際に、東平島はやっぱり十西小に編入するということで、前の教育委員さんがすごく努力なさって、本当に最終的にはどちらも合意を得て、もう合併する、一緒になる寸前だったところを最終的には破談になって、そしてそれが桜の大規模校になって、弥富中学校の移転というふうに流れていったんですね。考えたら、すごくたくさんお金を使ったわけなんですけれども、もういいかげん合併したんだから、弥富の子供のために本当に責任持って線引きをして、適正規模、大規模もあかん、小規模もあかんね。子供のために知恵を絞る必要があるんじゃないかなというふうに私は思います。以上です。

委員長 ありがとうございます。

新しい新築のマンションがいいのか、中古のマンション、民宿のような家がいいのかとなると、どうしても新築のマンションに同じお金を出すなら住みたいと思うわけなんですけれども、弥富中学校を見学させていただいたときに眺望もよいし、先生方も生き生きおやりになっているということは本当に思いました。

これ以上大きくすると目が行き届かなくなると、大規模校のこれまでの本当に荒れた学校といいますと、やっぱり大きな学校とか、いろんな要因があると思うんですね。先生方の御努力、それは大変な御努力をされていると思いますけれども、大規模になるということのデメリットのほうが中学校の場合は大きいということをおっしゃっていますので、私もこの会を3回経験するに当たって、そうかなあということをおもいます。

しかし、小規模のほうも問題になっているので、そこをどうしたらいいかというのは、もう子供をたくさん、移動するしかないわけなんです。それと、新しく教育環境をメリットのあるようなものに、魅力のあるものにしていかなければいけないということが一番のあれだと思いますけれども、簡単に十四山中学校を潰して、弥富中学校と弥富北中学校に振り分けるということではいけないというのが教育的な視点ではないかなということをおもいます。

委員 先回来、話が出ていると思うんですけれども、やっぱりどこかで線を引かなきゃいけ

ないんですよね。今までの話を聞いていると……。

委員長 それは、学区の話ですか。

委員 学区の話です。

学区、今の区割りを守る力が強くて、子供たちが遠くに通わなきゃいけないだとか、そういう話があると思うんですよね。要するに、何を大切にしてお線引きをするか。極端な話を言いますと、今ある線引きを壊しても新しい線を引きということをやるかどうかなと思うんですよね。

委員長 その話が前に出てきましたよね。

学区で区長さんがいろいろお話をされて、もう学区は子ども会の問題があって、お盆踊りでしたよね、盆踊りもその学区でやっているとかありましたね。そういうものが、コミュニティ行事も学区でやっているの、それを壊すことができないということでした。

委員 そこを、その教育的な観点から考えてどう言うかですよ、言うかというか。

委員長 そうですね。

子ども会は、中学校はないですよね。

委員 中学校はないです。

委員長 だから、小学校の問題ですよね。

委員 ただ、その中学校を、例えば新しい中学校をつくるとしたときも、また新たな線引きが出てくると思うんですよね。

例えば、弥富中学校と十四山中学校、新しいどこかをつくって、また新しい線引きということもあるかもしれないので。

委員 今、ちょっとお聞きしていて、これは学区の話なんですよ。

小学校の学区割りはこのままという方向がいいような雰囲気があるんですけど、例えば中学校に上がるときに、その学区割りは変えられるんですか。

つまり、今、平島さんがそのまま日の出に行っている形の中の、例えば西、東に分けて、中学校へ行くときには中学校が分かれるということが出来るんですかね。そういうようなことを思ったんです。

委員 それは、あまの中でもいっぱいありますよ。

委員 もし、それが出来るんだとしたら、例えば学校名を変えて、出来るかどうか分からないですが、十四山中学校を新しい名前にして、場所も変えて建てかえるか、お金のことは別にして、例えばそういうふうに新学校にして学区を割ったところが一緒に入った新学校、中学校区を変えるということが可能であれば、今の話はできるかな。平島さんにしてみたら、やっぱり平島の中でいろいろコミュニティーをやっていて、そうやっているのを、変えるのは物すごく強い反発があるんです。子ども会もあるし、いろんなことが、小学校については。

ですけど、例えば、それが今度中学校へ行くときに、じゃあこっち側は中学校はこっちの学校だよというふうに分けられるのであれば、皆さんに理解していただけるのかなということをおもいますけどね。

委員 そういうことだよね。

委員 子ども会も何も分かれんでもいいし。

委員 そういう意味で、小学校では無理かなと思うんですけど、中学校へ上がるときに学区割りを変えられるのであれば、できるのかなと思ったんですけども。

委員 津島南小学校が南中と暁中に分かれたんですね。

それから、甚目寺小もそうですね。甚目寺小学校も、甚目寺中学校と甚目寺南中学校に分かれますね。

委員 もし、そういうふうであれば、皆さんに納得していただける、特に平島の方に、十四山に行くというんじゃなくて、新しい学校名だけじゃなく、何かちょっとできて、そういうふうに一応十四山中学校の将来のことも考えというか、十四山中学校だけのことじゃなくて、弥富の子供たちの将来のことを考えて、今の弥富中学校の大規模から過大にならないようにするためには、その方法があるのかなというのはお聞きしていて思ったんですけど。

委員長 お金のことがどうかこうとか、我々は考えなくていいですよ。

教育長 ええ、結構です。

委員 どこまでをお話ししたらいいのかと、それとさっき委員長さんがおっしゃったみたいに、この委員会でゴールはどこなのという、要は何年後までを答申にして出すのかという、要は先ほどいろいろ、行く行くはどうなるのみたいなバスの話が出たところまでこの委員会で求めるのというようなことがあったりするんですけど、これは今年度でまとめるんですからね。そこまで行かなくて、今現在、もう数年の間のところ今困っていることを出せばいいわけかな。

委員長 3年あるんですよ。

委員 だから、ことしのところではどうするんですか。

委員長 いや、それは今回は答申はしないということで取りまとめをして、来年の方に申し送るという形で事務局からもお話を受けていますけれども。

委員 取りまとめというと、まとめというと、何か今年度の結論みたいに見えますので、取りまとめ部分は取りまとめというふうにしませてね、先ほど出たような具体的な例、こういう具体例があると出してもらって、出すことによって新しいメンバーの方がそれを読みますから、同じことの質問は出なくなると思うんですね。

委員長 そこをまた繰り返すような議論したくないなと思うんで、そういうのを一応私も今書いていますけれども。

委員 取りまとめ部分と通学時間とか、メリット・デメリットの出された細かい部分、事例を出されて、そうすると新しく決められて事態が進むんじゃないかと思います。

話がちょっと大きくなるかもわかりませんが、厚生労働省の人口動態調査というのがあるんですね。私たちの団塊の世代というのは二百何万人という物すごい巨大な人口ですけども、その子供たちというのはアラフォーというんですね、アラウンドフォーティ、40歳前後の方々が第2次ベビーブームと言われていていますね。その子供さんたちが今小学校から中学校におるんです。そんなに変わらずずっと来ますけれども、しばらく

く続くんですね、学校、その子供たちですからね、第3世代、我々の孫たちの世代なんですけれども、小学校ってね。それで、この地区が市街化調整区域と市街化区域と固定化されていますので、そのまま自然に、そのままずっと進むしかないんでね。そうしますと、減るところはどんどん減っていく、ふえるところはどんどんふえていくということ。社会的な固定的なこともございますので、中学校につきましては、それから、私も最初に地図をもらいました。地図をもらって、この第1回のときに地図をもらいました。人数も知らされました。見たときに、十四山中学校、新しく弥富市立中部中学校でもいいですが、そこに目が行き、その次は平島の東のほうに目が行って、東平島というんですか、この方がこちらのほうへ線引きで合併してくれば、人数は一応整うかなあということを直感でそう思いました。それが今回来まして、ちょうどそれが直感が当たったという感じで、なるほどと自分で納得しておるわけです。

委員長 私も、そういう直感を持っておりましたけれど、皆様の御意見を聞く上で、その直感とは何か違ったなあという意を強くしたんですけれども、同じ子細を伺いまして。

委員 一番最初のときに、子供たちにとって何がベストかというような話をさせていただいたと思うんですけれども、その本意は単純に人数合わせのために合併やいろんなことをすべきではないという思いがございました。

特に、小学校のほう、いかんせん過小化の栄南学区、私もそれこそ朝1時間かけて歩いて通いました。特に低学年を連れて登校するときは本当に気を使ってやっております。親からも、絶対事故だけは避けろと、かばえというようなことも言われて通っていましたが、それが今でもずっと続いております。じゃあ、例えば、栄南と大藤と合併してといったって、大藤まで行けるかというは無理な話でございますので、やっぱり過疎校にしろ、大規模校にしろ、デメリットとメリットは必ずあるんですけれども、生徒たちにとって一番うれしいというのは、先生たちにやっぱり名前を覚えられて、いろんな会話ができると。だから、過疎校のほうの方が本当はいいんじゃないのという思いもあるんですけれども、そうはいつでもやっぱり学校運営上そうはいかないとなれば、小学校は今のまましばらくいって、それこそ先ほどおっしゃった本当に人数が減っちゃって2学年、3学年と一緒に授業しなきゃいかんようなときに、新しくつくるか、スクールバスを整備すればいいんじゃないかなと思っております。

中学校について言えば、当然私も昔の旧弥富中学校まで自転車で走りました。それこそ、雨の日なんて泣いて走っておったぐらいの、ちょうど1年生のころは、それがだんだんできてきて、3年生のころは行きは30分、帰りはどこかで買い食いしたりして1時間とかとやっていたけれども、それもよい思い出なんですけど、やはり先ほどの十四山と今の弥富中学校と弥富北中学校と見ると、十四山がやっぱりちょっと過疎化になってきているのであれば、やはり単純に学区割りを変えましょうだと、恐らく反発もあると思うんですけれども、どこかに新しく、お金のことは苦にしないということであれば、どこかに中学校をつくって、やっぱり区割りで行くのが一番。

小学校は、やっぱり何となく小学校区というのは固まっていますので、栄南学区でいったら、ここからここまでは大藤だけだなんて分けられたら、子供たちは困ってしまい

ますので、中学校のときに、もう本当に十四山のほうがもっと減っていくのであれば、先ほど言われたような区割り変更で新しく建てかえてやれば、変わっていくほうも納得するような気はいたします。今のままの十四山中学校ですと言われると、何でとなると思いますけれども、やはりそういうような施策をとって区割り変更を。じゃあ、それが何年先かと言われるとわかりませんが、先ほど委員長さんも言われたように、何年まで見据えればいいのか。目先の、実は私も3年は見たい。3年間のことだけを考えてればあれなんです、その後は知りませんので、6年、10年先まで見ると、やはり区割り変更。

ただ、そのときに弥富市の人口、生徒数がどれくらいって想定がどうできるかという問題もあると思うんです。私立に行く人もあるでしょうし、ただ、栄南学区のほうは家庭数そのものがふえませんが、そういう特殊な事情があると思うんです。ここの平島とかあの辺だとまだまだふえてくると思うんですけれども、そんなようなことで、中学校のほうについては区割り変更と、それをやろうと思ったら、やっぱり新設して対応すれば、変わっていく人も納得できるのではないかなと思っております。

委員長 ありがとうございます。

委員 とにかく、ちょっといろんなことで、これは考えるべきなんですけど、大きくても小さくても、それぞれデメリット・メリットが必ず存在しておりますので、子供たちにとってメリットのほうを優先してあげたいなというように考えています。

そういえば、栄南小学校ですと、本当に生徒と先生というのはすごく親近感があるようです。私も一応海外へ行っておったときも、やはり生徒数が少ないということは、こういういい面もあるんやなというのは思っておりましたので、本当はもっと産めよふやせよじゃないですけど、若い人が産んでくれればいいんですが、そうはいきませんし、なかなか難しい問題もあると思う。

ただ、いつも先生とか話をすると、運動会をやるときに苦労するんですよ。運動会だけ合同でやってもいいんじゃないかという思いもちらつとはあるんですけど、それは時間がもう少し、本当に過疎化になっていったときに考えればいいんじゃないかなと思います。

中学校は、先ほど言ったように自転車がありますので、あれは体力も鍛えられるんですよ、大分。そういう面で、ちょっと遠くても通えますので、そういう分け方がいいんじゃないかなと思っております。以上です。

委員長 ありがとうございます。

委員 私が1人だけで思うだけけれども、3年で答申を出すと、ほぼ3年で。結論が出ましたと。それから、あと議会とか予算の通過と予算立てというのがあります。3年後プラス3年、だから、ことしから見て6年後ぐらいに具体的に何かできればいいなあという部分じゃないかとは思っていますけれども、人数が平成32年とか33年になりますと、弥富中学は649とか677、681とふえてきておりますので、早くも6年後、遅くて七、八年後に規模が適正になった状態になっているんじゃないかというふうには私は思っていますけれども、だから、六、七、八年後には実現されている状態であるのかなと私は思

っています。

委員長 弥富中学校は微増ですね。このままいくとふえています。弥富北中学校は余り変わらないです。それで、十四山中学校は減っていくんです、中学校も。だから、そこが大きな問題だとは思っております。おっしゃったように、6年後というと多分市長もかわり、委員も変わるし、この答申がどこで生きるかということを考えると、もう3年後しかないかなと思っております。そこで決断をしてもらわないと、我々の命があるかどうかかわからないし、やっぱり選んでいただいた以上は、その3年後にきちんと出してやってくれということと言わないと、6年後を見据えてといたら、もうどこかに行っちゃってるかもしれないし、あっちとかこっちとか。3年後で、10年後とか6年後と見据えた意見を出さなきゃいけないということで、そこをきちんとやってくれということをししないと、行政もこの諮問を市長がされた、この諮問を市長がどこまで重く受けとめるかという問題があります。

委員長 我々は我々で3年与えられているので、もうきっちりと、4人が残るわけですので、あの方々は同じ学校関係、小学校・中学校関係、学校関係の方々なので交代されるということですが。

委員 済みません。私は、区長という立場で出席させていただいているんですけど、書類を見たら、28年3月31日までになっているんですが、私も3年なんですか。

学校教育課長 済みません、一応今回皆さん全員に同じ期間でお配りさせていただいています委嘱状につきましては、ただ充て職でやっていただいている方につきましては、一応今年度で切りをつけさせていただいて、次回の方は人選、また同じ区長会の方のほうからとかPTA関係とか、あと校長会とか、そういう格好でまたちょっと考えさせていただきますので。

委員 最終的には、一番理想が十四山中学校の子をやっぱり弥富、日の出のような魅力ある校舎に建てかえて、そして平島の半分か3分の1を魅力のある学校に編入させると。小学校区は変わらないということで、十四山中学校の名称を新しい名称にすると。そうすると、一番抵抗感がなくて、全てバランスがとれるような案になると思いますけれどもね。

委員長 今の話は、もう3年後の結論が出ちゃっておるような話ですが。
先生、何か。

委員 いやいや、オブザーバーですので。毎年こうやってかわっていただくということで、また違った方が入られても堂々めぐりにならんような、そんな委員長さんの配慮が今非常に強く感じられて、これはありがたいことで、新しい方々がその上にまた意見を積み重ねて建設的な形での話し合いになっていくことを望んでおりますけれども、どういふ方向へというのは私の立場でしか申し上げられませんので、これから先の、今一つの案が出ましたけれども、地域住民の方、当該の、また特にそういった方々の意識をどう考慮していくかというところが非常に、実行上の一番難しい問題じゃないかなということも思っております。

これは、今の段階での話ではないと思うんですが、最終的にはそういったものも加味

した上で話がまとまるといいかなということは思っております。

もう1つは、財政上の問題、ちょっと別の問題として。

教育部次長 1つ確認させてもらってよろしいでしょうか、時間も押し迫っておりますが、この会4回通してですけれども、私強く感じたのは、子供たちの健やかな成長を考えるためには、この適正規模検討委員会はどちらかという小規模校の学校にスポットが当たっているように感じていたんですが、実は過大規模校だとか大規模校をつくらないほうが大切であって、小規模校の存在のほうを考えるのが2番手というような印象を受けたんですが、そういうふうな見解でよろしいでしょうか。

委員長 小学校と中学校は違うと思うんですね。小学校の場合は、現状としては徒歩通学が多いということがございますので、合併したり、大規模校になるということは現実的には難しいとは私は思います。

それで、大きな問題は中学校のほうだと思いますので、当然どちらが1番、2番かというのはわからないんですけれども、教育現場からの御意見ですと、やっぱり大規模校になってしまうことのほうが教育上問題が大きいという御見解ですし、私もいろいろ教育現場をこの三十、もう四十年近くになるんですけれども、見てきて、やっぱり大規模校の問題というのはやっぱりあるなあということは思います、教育上ですね。教育上といいですか、生徒指導上になりますけれども。

当然、小規模校も問題になると思います。要するに多くの部活動ができない、部活動は1つか2つに限られてしまうということがあるので、どっちがということじゃないような気がするんですが。

教育部次長 確認ですが、大規模校、小学校・中学校でもやっぱり教育上問題点があるのは誰もが認めるところで、大規模校をつくらないことイコールそれが小規模校の解消につながるというような捉え方で来年度以降進めていけばいいですか。

委員長 そうですね、現実的には恐らくそういう形になると思います。

教育部次長 そういうふうになりますね。大規模校をつくらないことが小規模校の解消になり、それが例えば学区の編成であったり、新しい校舎をつくったりという、いろんなそういう方策で、今、一つプランが出ましたけど、それに向けて来年度以降、そういうプランが可能であるかということを探るといふふうに踏まえてよろしいでしょうか。

委員長 そういう方向に今話が進んでいると思います。

過去に平島が西部小に行くことが問題だったんですか。

委員 そうです。

委員 小学校は変わらないんで……。

委員長 いやいや、学区の話です。平島を……。

委員 前は小学校を編入する案だったんです。

委員長 平島の子たちを西部に入れようとしたら反対になったわけです。

委員 そうそう。

委員 いや、反対じゃなく、反対では、そういう古いのもあって新しい案だけど、要は平島は一つの子ども会とか、そういうものをやってみるところの西と東の半分だけ西部の

ほうに分断という話が出たので、それはコミとして無理だと、それに子ども会としても無理なのでという話が出たんです。

教育部長 平島も広いんですけど、今、校長が言われるのは、十四山中学校に近いほうが、平島の東平島という行政区です。小学校は近いんです。

委員長 小学校は、西部のほうが近いということですか。

教育部長 近いです。恐らく小学校も中学校も、東平島の方は全部とは言いませんけど、東側の区域の方は近いと思います。

委員長 やっぱ本当にこれから学区の見直しをしていくことが、例えば十四山でも三百島とか1号線の北にあるところは、弥富北中学校に入れたほうがいいですよ。1号線渡ってくるより安全ですよ。

教育部長 現実には、今、弥富北中学校の問題ありましたけど、弥富北中学生と十四山中学生が1号線上で交差するんですね。片方は東へ行き、片方は西へ行くという。

委員長 だから、やっぱり現状をもう一度見直して、そのあたりの学区をなくす……。

教育部長 だから、三百島の話が出ますと、小学校区という話になりますと、小学校をそのままというお話で進んでいますけど、結局小学校区も一部変更をせざるを得ないことになります。

委員長 そうですね。だから、学区の合併ということも考えているんです。

委員 それは、普通の上のほうから見れば、上のほうというのは、全体を見れば正しいとみんな思うんです。

ただ、そこに感情とか生活の基盤がある人からすると、遠くてもいい、私たちはという、あっちへ行くからいい、放っておいてというのがあって……。

委員長 大人の論理ですよ。

委員 いや、子供たちもどうでしょうかね。

委員 三百島のほうのところに弥富北中学校がある分、遅かったら弥富北中学校に行きたかったんじゃないと言ったら、ううん、僕は絶対十四山中学校に行きたいと思っておったと言うんだわね。やっぱりお父さんもお母さんも十四山で、西部小できておるもんで、もうDNAがそういうふうになってまっておるだね。

委員 それは不思議なもんでね、やっぱりそうなるんですよ。

委員 そう、だから、私も大人の論かなと思ったんです。でも、子供たちと話をしていくと、子供たちが学区を変えるということに対する拒否感のほうやっぱりすごくあって、もちろんそれがいいとは言いませんよ。だから、それをさっき先生がおっしゃったように、皆さんに、子供たちも含め大人たちに、学区を変えるということは物すごく関心があるなあということはずうっと感じていて、できるとすると、だから中学校のほうでも当然今委員長から一部小学校のところも変えざるを得なくなってくるということをおっしゃったんですけど、やっぱり学区を変えるということは物すごく大変なもののかなと思っております。

委員長 そうですか。まあ、ずうっとそういう環境で来ていたら、特に子供ですと友達関係もありますからね。友達と分かれてそっちに行くということは、なかなかできんのかもし

れませんね。

非常に困難な、学区の区長さんは1年ごとに交代するんですよ。

委員 弥生学区は2年になるんですが、あと一部2年のところもありますけれども、多くは1年だと思います。

委員長 それで、また区長がかわっても、私が区長のときにこうしちゃったというのは嫌だからというのもあって、いろいろ問題点は見えているんですけど、それを具体的に変えていく方策というのはなかなか見当たらないですね。そういうところも、次の次年度に申し送っていけるといいかなと思いますけれども。

今回、いろいろさまざまなまとめていただいた意見プラスいろんな視点から出てきておりますけれども、それをまとめていただいて、各委員さんに一応確認をとっていただいて、それを問題なかったら次の申し送り事項にしたらいいいのかなと思いますけど、ちょっと時間的にそれを一つ一つこうしましょう、こうしましょうとなかなかできないんですけれども、そのあたり、いかがですか。

学校教育課長 とりあえず、今回皆さん方の意見をたくさんいただきましたので、もう一度ちょっと、とりあえずどうですかね、今、メリットとデメリットをどんどん今出てきた部分を積み上げて、それで取りまとめというより、こういう部分を話したということで次回に渡すというような格好のほうがよろしいんですかね。

委員 小規模校の小学校4校、小規模校の4校については、統合とか廃校、統合合併を考えずに、この委員会についてはなぶらずにそのまま学校としては進んでいくということをするんですが……。

委員長 小規模校でも大きな問題はないという。

委員 大きな問題はないという今年度の一つの結論といいますか、まとめるといいますかね。

学校教育課長 じゃあ、とりあえず、まとめはまとめで1つ、今の基本的な小学校の部分と、それから中学校の部分でお話が出ましたので、小学校については先ほどの小規模校のままでもとりあえずいいんじゃないかというような格好で取りまとめをさせていただいて、中学校については、大規模校を解消するための方策ということで、一部の小学校区を変えるんじゃないくて、地区だけを地区割りで編入させるというか、中学校の区域を変えるというような格好で今お話がまとまっておるといような格好で取りまとめておいて、あといろいろ繰り返さないように、今まで出た皆様のお話を別にメリットとデメリット、そういうような部分で話し合った部分を上げさせていただくという格好でまとめさせていただいて、もう一度……。

委員長 今、先生が言われたのが一番大きな根幹で、それで、それに学校名、中学校の名前を変えとか、学区の問題がいろいろあるとか、そういうのをつけ加えていただけるとありがたいと思いますけれども。だから、きょうずっとお話になって、前回3回まで、皆さん恐らく共通認識になると思うんですけども、それに対してそんなことはないんだという御反対の意見はないような気がします。

学校教育課長 それでは、またちょっとお時間いただいて、まとめさせていただいたら、皆様方のほうにもう一度また送らせていただきます。

委員長 お願いします。

委員長 小学校はね、今のままでいいと思いますけど、中学校は弥富なんだぞという。

例えば、私のいる弥富のほうに、平島の皆さんだとか、もしかして栄南もちょっと東側にできると、栄南のほうから来たほうが近いかもしれません。栄南の。

委員 どこにできるかによって、可能性はありますね。

委員長 じゃあ、そこのあたりも視野に入れてということで、お金の問題はさておき。私、体育をやっているんで、例えばサッカーの、今サッカーが人気ですので、十四山じゃないですけど、弥富中学校とか弥富東とかの中学校はサッカー部のJリーグのサテライトというか、そういうものを置きますよと。それで、校庭といいますか、グラウンドを全部芝生化して、そういう先生を派遣して、サッカーを盛んになる拠点にしますよとかね、そういう働きかけをしたら、t o t oの収益で大分上がっているんで、田舎でも申請したらいいんじゃないかと思うんですけど、そういうことはできないですかね。結構、子供たちもサッカー、野球はそういうことはないんですけど、サッカーは結構そのあたりに対して、小学校まで浸透してやっている方向性で、サッカー、Jリーグ自体がそういうふうになっているのね。ぜひ、魅力ある新しい学校づくりをして、弥富中学校に負けないようなものをつくっていけると、名前だけじゃなくて、いけるといいのかなという事は思っておりますけれども。

時間も、十分たちましたので、そろそろまとめですけれども、事務局のほうにあとをお任せしちゃうような形になりますけれども、平成25年度の適正規模検討委員会をこれで終了させていただきたいと思います。

ありがとうございました。

学校教育課長 その他で1点、ちょっとお話しさせていただきます。

先ほどもちょっと任期の話が出ましたので、ちょっとお話しさせていただいたんですが、学識経験者で今回お願いしてみえます委員長さんと副委員長さん、それから公募のほうでお願いしてみえます東嶋さんと服部さんにつきましては、また引き続きということなんですが、一応ほかの学校代表の方と区長会とPTAの関係の方につきましては、また新たにまたこちらのほうでちょっと人選をさせていただいて、また新たにこの委員のほうに入ってくださいですが、一応来年、ちょっと早いんですけど、一応7月上旬ごろを来年度の第1回目を予定したいなというふうに考えておりますので、また日程なんかが決まりましたら御連絡させていただきますが、一応7月でございます。

その他のほうで予定しておるのは以上でございますので、これで第4回目の適正規模検討委員会を終了させていただきます。本日は、どうもありがとうございました。